1999年7月15日発行

Ishi Datami

いしだたみ

復元整備進む出島地区

（長崎新聞社提供）

１９９９年夏

VOL・１４

長崎南高関西同窓会

NAGASAKI

新歳時記

出島

私たちの故郷長崎は、鎖国時代も唯一世界に開かれた町でした。その窓口となっていたのが長崎港に作られた出島です。平戸にあったオランダ商館が出島に移されたのは１６４１年のことですが、鎖国時代も出島を通じて西洋文明が入って来ました。幕末来日したシーボルトは出島に薬草園を作り、長崎市郊外の鳴滝に塾を開いて医学や植物学を教えました。

日本とオランダの交流は、１６００年にオランダの帆船「デ・リーフデ号」が大分の臼杵沖に漂流したのが始まりです。日蘭交流４００周年にあたる来年、「ながさき阿蘭陀年」の記念行事が平戸や佐世保、長崎などの各地で開催されます。オランダといえばハウス・テンボスやオランダ村が思われますが、最も縁の深いのはやはりこの出島でしょう。

いまは埋め立てられて面影もありませんが、かって長崎港に扇型に張り出していた出島の復元作業が現在進められています。建物が復元されれば鎖国時代をしのぶよすがにもなのではないでしょうか。出島に残る洋館は明治に入ってからの居留地時代のものですが、資料館にはオランダ商館時代の遺物や出土品などがたくさん展示してあります。

江戸時代はオランダと中国だけが日本との貿易相手でした。この二つの国の影響が色濃く残る長崎文化を「和（日本）、華（中国）、蘭（オランダ）文化」とよぶのも、なるほどと思われます。

２回生　中野 章子

インデックス

新歳時記
　中野章子・・・・・・・２
懐かしい手紙
　吉野和之先生・・・・・３
クローズアップ仲間
　渡辺俊樹・・・・・・４・５
リレーエッセイ
　桑原芋吉・・・・・・・６
リレーエッセイ
　谷口俊也・・・・・・７・８
リレーエッセイ
　室田育江・・・・・・９
バードウオッチング
　・・・・・１０・１１
インフオメーション
　・・・・・１２

懐かしいてがみ

吉野 和之先生

藤枝東高　８年
長崎南高１５年
青雲学園１６年
英語担当

愛犬ふじ号と

「青葉の候となりました。皆様には益々御清栄のこと、お喜び申し上げます。私こと、この度、３９年間の教職を退職いたしました。藤枝東８年、長崎南１５年、青雲学園１６年の各高等学校在職中は、大変お世話様に相成り、厚く御礼申し上げます。

『人生には、老後もなく、余生もなく、ただ一度きりの厳然たる人生がある』といいます。そのただ一度きりの人生を、これからも気力、知力、体力の充実に努め、悠々と生きて行きたいと思っております。

今後とも、宜しくご指導いただきますようお願いして、ご挨拶といたします。」

上のような、いささか気負った挨拶状を書いてから、はや５年余りが過ぎ去りました。その間、生来怠け者の私のこと、無為徒食の日々を送り、今や、朝１時間の犬との散歩が唯一のルーティンとなっています。

有り難いことに体調は良好で、１，２の部品の傷んだところはありますが、これは年齢を考えるとやむを得ないことでしょう。歯だけは「あと２０年は大丈夫ですよ。」と、南高０Ｂの先生のお墨付きをもらっています。

永年、園芸と帆船作りを趣味としてきたのですが、洋蘭愛好会は退会し、１隻２年余りかかって製作してきた帆船は、現在５隻目で中断しています。これは、私の左目が万全でなく、細かい仕事が出来ないためですが、そろそろ再開しようかと思っています。

また熱帯魚を数種類飼育していますが、２週間ほど前に産卵、孵化しました。

給餌など手がかかりますが、５，６０尾の稚魚が遊泳しているのを眺め、育てていくのもまた楽しいものです。

２ヶ月に１回位はハウステンボスに、家内と出かけます。格好のドライブコースです。

今回、池谷秀子さんより、９月の関西地区同窓会へのお誘いを受けました。「客寄せパンダになって下さい。」と上手におだてられ喜んで出席させてもらう予定にしていますが、ジャイアントパンダにはなれそうもなく、かえって出席者がへるのでは、と疑懼するところです。

関西にも、毎年年賀状をいただく人がいるので、あの人、この人の青春時代の顔を思い浮かべながら、「久しぶりにあえるかな」と今から楽しみにしています。

盛会を期待します。

（前回の総会でアンケートをとったところ
ゲストの恩師として吉野先生の名前が
多数挙がっていました。
早速およびしましたので、みなさんお楽しみに。）

クローズアップ

仲間 No.3

渡辺　俊樹

１１回生

現在 大阪道頓堀で

和洋旬菜「ままや」

リバーサイドオオニシ３Ｆ

和洋創作「あら・かしこ」

リバーサイドオオニシ７Ｆ

洋酒バー「ろくでなし」

ナンバミューズビル４Ｆ

３店を経営

トールペインテイングが上手な奥さん、かわいい３人のお嬢さんの５人家族

彼は、「いしだたみ１３号」のインフォメーションの平成１１年年間計画を見て、突然出席の電話をくれた。

久しぶりの新人登場に、事務局は色めき立った。

期待で膨れ上がった我々が待つ新年会の席に、赤いギンガムチエックのシャツ、生成の綿パンのラフな格好で彼は登場した。

やはり同窓会の名簿を見ても、サラリーマンは圧倒的に多い。おまけに家業を継いだのでもなく、地元でもない場所で、三つもお店を持っているのは、なぜ、なぜ、なぜ。

斯くして、「クローズアップ仲間」のインタビューを受けてもらおうと即決した。

道頓堀の川沿いのビルを３階まで上がると、奥さんお手製のトールペインテイングの看板が掛かった「ままや」がある。

若者や女性がターゲットのおしゃれなお店で季節の野菜を使った惣菜と飲み物、客単価３０００円程だと、教えてもらった。

渡辺さんは、同志社の社会学科で新聞を学び、卒業と同時に、飲食業大手の大和実業に入社。当時も彼のような経歴は珍しかったらしく何度もインタビューを受けたそうだ。

彼にとっては、耳にタコが出来てるだろうがどうしてこの業界に入ったのか質問した。

新聞の仕事に進みたかった彼は、また音楽にも興味がある青年だった。

京都に来てますます音楽に触れるチャンスが増え、在学２年のころからギターの弾き語りやバンドの演奏で「店」に入った。

しかし、渡辺さんは自分の音楽の才能を、食べていけるレベルではないと見極めた。
そのかわり、「店」という世界はなんと楽しい所かとはまってしまった。
渡辺さんは人を押しのけて前へ前へ出ていくタイプではない。
おっとりと誠実な雰囲気は、一見客商売には向かないようにも感じられるが、人を楽しませることに、無上の喜びを見いだす彼には天職だったのだと思った。
しかし、その就職を両親にも納得してもらうには、一波乱あった。
就職先の内容を「洋酒関係」としばらくはぼかしていたらしい。
ところが、悪いことは出来ないもので、大和実業は長崎にも支店があり、新聞広告でしっかりばれてしまったとか。
当時バニーガール全盛のころで、やはり親は「かあちゃん情けんなか」という反応になりますよね。

だけど仕事は楽しかった。
水を得た魚のように仕事を覚え吸収し、とんとん拍子に支店を任されるようになった。
昭和５５年には神戸でワインバーのオープンを店長として手がけ、その後ミナミで音楽の店を任された。グループサウンズのリメイクが流行ったころで、ＧＳ時代のスターさんたちとも仕事をし、業界でやっていくための下地、人脈を着々と身に付けていったのだと思う。
２４歳で友禅の仕事をしていた奥様と結婚。
子供が２人できた２９歳で独立。
宗右衛門町でちょっと懐かしい音楽をやる「チャーリー」を開いた。（現在はない）

「ところで資本金は？」と誰でも聞きたいですよね。
渡辺氏曰く、「こう見えてもコツコツタイプで、おおげさに云うと一週間１０００円でもやるんですよ。」
人が遊んでる時間に仕事しているのだから、自分が遊ぶ時間はなかったかもしれませんね。
同世代の人より、ちょっと高給で、それを地道に蓄えてということです。
まだバブルの前で、「チャーリー」を開いて４，５年はいい時代だった。
しかしそこはお酒を出すだけだったので、先々危ないぞと思い、８年前、「ままや」を開いた。

仕事中の渡辺さん

仕事のモットーはと聞くと「楽しく」と答えた。
実は昨年末、店を一つ閉めた。
続けるか、閉めるか、随分悩んだようだ。
一つの決断をした彼の口から、「等身大」という言葉が出た。
大きな山を乗り越え、仕事を楽しんでいる人の顔だ。
情報は多すぎてもいけないと云った。そんな渡辺さんだからこそ彼にしか出来ない楽しい「店」をきっと提供し続けてくれるはずだと思った。

文責　５回生　池谷　秀子

リレーエッセイ PART1

震災復興木版画展
「湊川と路地のおじぞうさん」

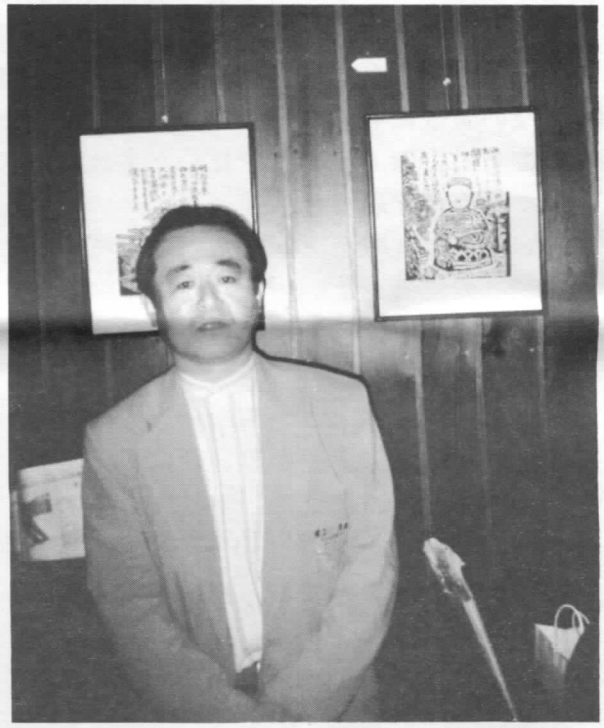
２回生　桑原 芋吉

神戸の湊川のおじぞうさんは「開運地蔵尊」と呼ばれて、みんなに親しまれてきました。それにはこんなお話がありました。

湊川の地名は古くは天平１９年（７４７）法隆寺の資財帳に見られます。湊へ注ぐ川の意味から「湊川」の名が付けられ楠木正成の湊川合戦も今の湊川公園の地から自然に西南に和田の湊に流れていた時の湊川をいうのです。それから４００年ぐらい前に現在の湊川新開地筋へつけかえて川崎の浜へ注ぐようにしました。明治に入り兵庫と神戸の交通を分断する天井川の付け替えが懸案になっていたところ明治29年8月、大洪水があり福原をはじめ一帯は濁流に包まれて神戸駅前は水深　1.5M以上となり死傷者が数百名に上がるという大水害が起きました。これを機会に付け替え工事が進められましたが、この川筋の付け替えが上流の町に度々洪水をもたらすとは皮肉な事というより、自然の川筋が元に戻ろうとするエネルギーの大きさに自然と共生する事の教訓を知りました。

昭和１３年８月に付け替えた新湊川が氾濫して大洪水となり、付け替えた付近一帯湖水のようになり、湊川町に「おじぞうさん」が漂着しました。町の人々はねんごろに供養し、いつの頃からか「開運地蔵尊」と呼んで大切にお守りをしてきました。しかし再び昭和４２年７月大浸水の被害がありました。

あれから３０年「そろそろ洪水が起こるかもしれない」等とみんなは冗談を云っていた折しも平成７年１月１７日大地震が発生し、湊川町では地震による倒壊及びその後の火災により８名の方々が亡くなるという大惨事となりました。約３０年に１度水害に遭遇し、その都度力を合わせて、町を再建してきた体験をもとに今度もみんなが力を合わせて住宅再建、町の復興に取り組んできました。



桑原芋吉さん

震災から４年、あの日以来、黙して町の再建を見守ってきた「開運地蔵尊」を通して湊川の町づくりを記憶に留めたいと思い版画を彫りました。開運地蔵尊はただ手を合わせてお願いをするのではなく「みんなで力を合わせて運を開いていく」誓願の地蔵尊だったのです。大洪水により漂着し、自力再建する町の人々の姿を見守り、精神的支えとなり何とかしたいという人々の思いの手助けを呼び込む力がおじぞうさんの「開運力」でした。町づくりはいろんな思いが絡み合いながらやってきました。開運力により導かれてはせ参じた私でありますが、結末を見ずに去ることになりました。地蔵尊のころにはみんなでお祭りを賑やかに行い、チューチューやかっぱえびせんをもらいに大勢の子供達がお参りにくることでしょう。

今阿蘇にいてこの文を書いています。阿蘇には人の心をいやす大自然とともに、多くの

神話や民話が残り、今も昔ながらの農耕祭事が受け継がれています。テクノロジーが発達しこの上なく便利で快適さを実現した現代社会。しかしある意味では画一的で生活の全てが管理され、便利さや快適さを追求し何か大切なものを忘れ去ってしまったのではないか。
阿蘇には私たちが失ってしまった「何か」が残っています。それを知りたいと思い阿蘇に来ました。阿蘇の人々の四季の暮らしと自然を版画にしたいと思っています。(阿蘇ファームランドにいますので遊びに来てください。)

2回生の桑原芋吉さんが版画展を神戸で開かれ、早速同窓会の有志で押し掛けました。そのような場合、自薦他薦に関わらず、事務局までお知らせください。
取材に伺います。

桑原芋吉さんの単身赴任先
〒869－1402
阿蘇郡長陽村大字下野46－1
佐方コーポa210

TEL0967－35－0781

リレーエッセイ PART2

「日本に帰国して感じること」

１４回生　谷口 俊也

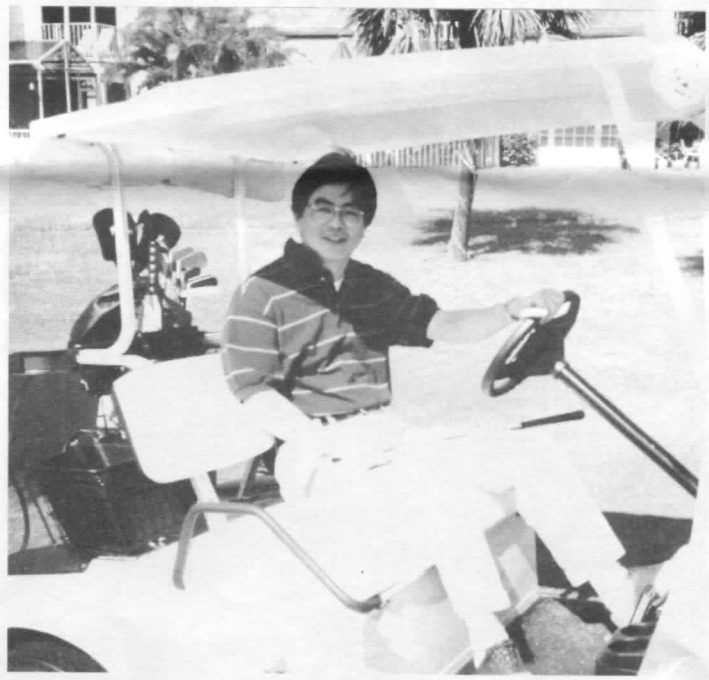
５年間のニューヨーク駐在を終え昨年６月に大阪に戻って参りました。
この「いしだたみ」にも５年前にニューヨークから投稿させて頂いて以来５年ぶりの登場です。

筆者は幸か不幸か駐在の５年の間１度の帰国のチャンスもなく、５年ぶりの日本は、まさに筆者を浦島太郎状態にしてくれました。新聞やテレビで日本の様子は分かっているつもりでしたが、実際に帰ってみると本当に5年間という年月を感じます。
今回は帰国後に筆者が感じた身近な事例を簡単にご披露させて頂きます。

やたらと携帯電話を持った人が増えておりました。増えたというより”出現した”というほうが筆者の驚きを的確に表現するかもしれません。
歩きながら、あるいは電車の中で電話をかける風景は5年前には、めったにお目に掛からない物でした。
中には駅のコンコースや階段に座り込んで電話に興じる若者を多く見かけます。
場所や状態をわきまえない電話は特に気になるものです。特に聞き耳を立てているわけではありませんが、その内容にもさして緊急性、重要性がない様子にせめて場所をわきまえてやってもらいたいものだと思います。
アメリカでも結構携帯電話が普及しておりましたが、幸いなことに英語のヒアリングに難のあった筆者にとり会話の内容が理解できず、さほど苦になるものではありませんでし

た。
やはり電話をする人も最低のマナーを守っていたという事もあるでしょう。
５年の間に日本人の髪の毛の色が変わっておりました。
特に若い人々が金髪や鮮やかな緑色に染めている様子は筆者には異様に写ります。
昔からミュージシャンや芸術家を気取る人々の間には見かけられたものでしたが、これほど一般に”普及”していることには驚きました。
筆者の身近な会社の女性たちも年齢を問わず少し茶色っぽくアレンジした女性が大半です。この程度のライトなものは筆者も良いかなと思っていますが、金髪や緑色はちょっと日本人の顔立ちを考えると如何なものかなと個人的には思います。
もし読者の方々の中に、そのような方がいらっしゃいましたら申し訳ありません。
因みに筆者の妻も日本に帰りいつの頃からか髪が茶色っぽくなっておりました。
もう一つ筆者が日本に帰国して驚いた（痛感した）ことは自分の廻りののスペースがやたらと狭いことです。家の中もそうですが、公共のスペースで他人との距離が異常に接近していることを感じます。
電車然り、会社の席のスペース然り、歩行中然り。公共の場で赤の他人と肌が触れたり、肩があたったりする事は、日常茶飯事で、しかも、例えば肩があたっても”すいません”の一言もなく、逆に相手を威嚇するように睨めつける場面に遭遇すると気持ちが寒々してしまいます。
現在長距離通勤を強いられている筆者がもう一つすさまじいと感じたことは電車の席取りです。電車が着くや否や一応の列の秩序を保ちながらも我先にと席取りに向かうあの姿には圧倒されました。
と云いながらも帰国して１年が経ち日本の社会生活へ適合すべくリハビリを終えた筆者が一生懸命席取りをやっている今日この頃ですが・・・・。

以上　筆者が帰国して身近なところで感じたことを述べさせて頂きました。
又機会がありましたら、日米のライフスタイルの違い、教育の違いなど、筆者の経験より感じたことをご披露したいと思います。



谷口俊也さん

新人時代の室田さん

リレーエッセイ PART 3

「いしだたみ」１２号でお知らせしましたが、２９回生の室田育江さんの原稿が紛失するという事件がありました。
その後日談です。
近畿郵政監察局という厳めしい肩書きの方からお電話があり内部で調査を続けていたところ例の一件が「盗難」事件であると判明したとのこと。
平凡な主婦にとって事件に関わるなど生まれて初めて。
ドキドキしてしまいました。
普通郵便にいれた現金を狙った犯行だったらしいのですが、律儀にも郵便物は捨てずにいたらしく、１年ぶりに室田さんの原稿が戻ってきました。
彼女も社会人２年目で、バリバリのお医者様になられたことでしょうが、ういういしかったあの頃の文章を紹介させていただきます。

２９回生　室田 育江

私の南高時代、それ以降においても、ラグビー部は私の大きな部分を占める。そのうち半分は、その頃できた大切な友人たちによるもの。そして半分は、ラグビーそのものの持つ性質で、それは私が描く生き方の要素となっている。
ラグビー部に入るまで、私にとってラグビーは楕円球と縞のジャージのイメージのみだった。それでは何故、こんなにラグビーが好きになったのか？実は私自身もその理由は分からない。
しかし、ラグビーのどこが好きかと問われる時、答えは、私がこうありたいと願う生き方に通じている。
まづ、防具をつけずに相手とぶつかる潔さ。生身で闘うという当たり前のようで難しいこと。
次に、１５人がそれぞれのポジションを果たしてこそボールがつながり成果となること。
ラグビーのポジション分担は、他のスポーツに較べて明確で、１人でもその「職」を離れると全てが乱れる。１人１人が責任を担っている。
そして、ノーサイド。ノーサイドとは、「敵、味方のサイドがなくなる」という意味である。８０分間、闘い抜いてこそ味わえる感覚だ。ノーサイドの笛が鳴る時、その場でゲームに関わった人全てが仲間になり、またラグビーが好きになる。
ラグビーには人を「ラグビー馬鹿」にしてしまう魔力がある。
私は大学時代バスケをやっていたし、テレビで相撲も見るが、ラグビーに惹かれ、少しでもラグビーに近づき、こんな生き方がしたいと思っている。
そんなラグビーの世界に、あなたも足を踏み入れてみませんか。

（現在故郷長崎で頑張っておられます。）

長崎新歳時記をいつもお願いしている
中野章子さんが本を出されました。

女たちの日月
今井 美沙子
中野 章子
樹花舎　　1800円

前作品「男たちの天地」の女性版で
澤田美喜、武田百合子、森茉莉、
美空ひばり、高群逸枝、向田邦子等の
人生をとりあげています。

バードウォッチング

2月21日　兵庫県立甲山森林公園
リーダー　金丸源治
参加者　松本藤一　藤原由美子　井上久美子　金尾義男　金尾友紀　金尾隆広　手塚律子とご主人　七嶋義則　池谷秀子

１７回生　七嶋 義則

平成１０年１２月末、福岡同窓会諸藤会長と、６回生藤原由美子（関西同窓会）さん、１７回生新幹事の山田君、それに私の４人は年末の雑踏の中､南高へと原校長を訪問した。同窓会のあり方として、関東、関西、福岡の各支部は独自の活動をしながら成長してきている。

ある疑問が生じたのは１０周年に向けて、何かイベントを行うという提案があった時だった。同窓会そのものが一人歩きを始め、各支部のメンバー達の自己満足だけに終わっているのではないか。

それも本筋の一つではあるが、母校との連携を忘れていないか？

そこで今、自分たちが出来る事は何かを考えて、福岡同窓会のオリジナル性を重視した事をプレイベントとして始めようと思った。

福岡といえばやはり太宰府天満宮、ここのお祓いを受けたエンピツを受験生全員に配る。

これが同窓会と在校生を継ぐきっかけになりはしないかと・・・。この案が採用され、第一段として原校長を訪問した。

と同時に福岡から大阪への転勤の挨拶も含めて。

インフルエンザが流行る中３９度の高熱を発する我が身を携え、大阪へ赴任した私が感じた事は「寒い！！」の二文字だった。

新年会に呼んで頂いた時にバードウォッチングの話を聞いたのが事の始まりだと思う。

同窓会各支部ごとにいろんなイベントがあってもよし。ただ参加するのは？義務感と好奇心の両方に刺激された結果が「参加します」だった。しかし、冬の寒い朝から・・・と出無精の体に気合いを入れて出発したのが、甲山森林公園だった。

「おはようございます」の挨拶に始まり、田中真紀子先輩（誰の事でしょう）の眠気を吹っ飛ばす元気な声に確実に目が覚めた。

あたりには雪がちらついている冬の朝。バードウォッチングがスタート。野鳥を見るのは初めて、鳥といえば「ズリ」「四つ身」等焼き鳥しか頭に浮かばぬ私にとって初の体験。ベテランの金丸さんの説明がとても新鮮に思えた。

「ジョウビタキ」「アオジ」「ルリビタキ」「ヤマガラ」「キジバト」「シロハラ」等１０数種類の野鳥の名前が羅列されたがカタカナの名称は麻雀の役の如く右から左へとは覚えられず、メモをとりながら、説明を追いかけるに終始した。

甲山公園の中をどれくらい歩いたのだろう。コンビニで買った弁当と焼酎のお湯割りを飲みながら疲れた足を休めた高台からは神戸から大阪の街が見渡せる。初めてこの街に来てここに何年住むのだろうと自問自答を繰り返す。

あたりを見れば中年（失礼）以上の男と女が体力の限りを使い果たしたのか、昼食タイムのわずかな時間に足腰の疲労を嘆いている。そう、腹も出れば、頭も薄くなる。ああもののあわれかな。しかし、歩くのは良い。体に良いことを今のうちに・・・頑張るぞー。

ただそれ以上に良かったのは、同窓会という縦と横の関係。バランスの良さが同窓会も個人も成長させる。そういう土俵を与えてもらった事に感謝しなくてはならないという事に実感した事だった。福岡同窓会の永久幹事は

大阪に貸しだしされても頑張りますよ。だってそうでしょう。どこに居ても母校は一つなんだから。

7回生　金丸 源治

（今回のリーダー）

昨年の「いしだたみ」でリレーエッセイを書かせて頂いてから早いもので1年が過ぎてしまいました。原稿を引き受ける時は気軽に受けるのですがいつも遅れて編集の池谷さんに迷惑をかけることになります。

今回も遅れてしまい、申し訳なく思っています。

話変わって、2月に甲山森林公園でバードウォッチングをやりまして10名の方を案内させていただきました。雪が時折ちらつく日でしたが、都市近郊で見られる冬鳥を楽しんでいただけたでしょうか。ルリビタキ、ジョウビタキ、シロハラ、アオジ等ちょっと気をつければ平地の緑の多い公園でも見られる代表的な冬鳥達で、興味さえあればすぐにでも覚えられるような鳥です。

中には、こんな寒い思いまでして鳥を見るのなんて2度とごめん、なんて思った方もいるのじゃないでしょうか？寒さついでにいっそ雪が積もれば、雪の中の瑠璃色のルリビタキを眺めながら鳥見酒と洒落込めたかもしれません。

この付近では年に一回くらいしか積もらないのでそのチャンスも少なくて残念です。初めての方にはもっといい季節に、ハイキングがてらバードウォッチングを楽しめたらよかったのですが、この時期の鳥は姿だけでなくさえずりも楽しみなので、日の出の頃から探鳥を始めたりします。朝が早すぎて集合するにも不都合なので、次の機会でも、早起きの好きな方がいらしたら案内させてもらえたらと思っています。

今年のゴールデンウイークには甲山でも夏鳥のオオルリ、キビタキ、アカハラ、クロクグミ等、さえずりを充分たのしむことが出来まして、バードウォッチャーとしては例年になく満足のいく１週間でした。

日の出と共に鳥を探していると、私よりも先に歩いてきた野鳥の会の人がいて情報を教えてくれるのですが、好きでやっているとはいえ、上には上がいるものだなと関心したりします。野鳥の会は紅白歌合戦で一躍有名になりましたが、中にはいろんな種類の人がいて、鳥を見るより面白いと思うことがあります。鳥の数を数える人、見た種類を自慢する人、さえずりに詳しい人、鳥がいなくても自然に浸るだけでも満足な人、撮った写真を無理やり見せつける人等、様々な人がいて興味深い集まりです。但し、構成は年配の方が多く、会としても若い方を増やそうと努力しているようです。

趣味の世界は数限りなくありますが、若い時の趣味を体力が落ちても続けられるものとしては、このバードウォッチングなどお薦めですので興味のある方はいかがでしょう。

新緑の中、紅葉の中、冬枯れの森の中を歩きながら、また、庭やベランダでも、やってくる鳥を楽しむのは誰にでもできますし、その名前がわかるだけでも嬉しいものです。

これからも、暑い日が続きますので、皆様のご健康をお祈りします。

ワンちゃんの横七嶋さん、一番左金丸さん

インフォメーション

●第９回総会ご案内

第９回総会を下記のとおり開催します
皆様のご参加をお待ちしています。

時：１９９９年９月１１日（土）
PM４：００より２時間
受付はPM３：４０より
所：大阪キャッスルホテル
６階鳳凰の間
大阪市中央区天満橋京町１－１
地下鉄谷町線「天満橋駅」上
℡０６－６９４２－２４０１
会費：男性　８０００円
女性　６０００円
学生　３０００円

尚、同窓会年会費未納の方は、当日別途いただきます。　（２０００円）

招待恩師
吉野和之先生（英語担当）
中村格先生　（数学担当）

２次会：同ホテル内にて別途場所を予約済み
会費３０００円程度

発行人　長崎南高関西同窓会
会長　松本 藤一
編集人　池谷 秀子
〒５４１－００４１
大阪市中央区北浜２－３－６
北浜山本ビル３F　松本法律事務所
Tel　０６－４７０７－８５１８
FAX　０６－４７０７－００３８

●秋期ゴルフコンペ

１１月１３日（土）

●忘年会

時：１２月３日（金）
PM ６：３０～

所：中央軒
℡０６－６６４３－００２０
大阪市中央区難波４－２－１１

●バードウォッチング

秋口に予定しています。

どなたも大歓迎！！
興味がある方は、事務局まで電話ください。

●募集

発表会、出版、個展など、楽しい計画が、ありましたら、事務局まで連絡ください。
また、各回生ごとの行事案内、行事計画も、ぜひ教えてください。

●募集

「いしだたみ」編集の仲間に参加してください。パソコン得意な方、待ってます。

編集後記

バードウォッチングに参加しました。
金丸さんの指導のおかげで、玄人のように「あっ、ジョウビタキ！！」などと、おおはしゃぎの１日でしたが、私たちだけだったらカラス、ハト、スズメしか確認できなかったと思います。
「なにごとも先達はあらまほしけれ」

（５回生 池谷 秀子）